

---

# 僕と彼女と器（うつわ）のそこ

おせろ道則

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

僕と彼女と器うつわのそこ

### 【Nコード】

N7368D

### 【作者名】

おせる道則

### 【あらすじ】

彼女は、いつもでどこでも「余り」を作る。食事を残す。第二希望の職場を選ぶ……失うときが怖いという彼女を、僕はどうしたら引っぱり上げてあげられるのだろう。ラーメン屋の器うつわのそこは、今日も彼女に見てもらえない。

込み合うラーメン屋のカウンターで、長いストレートの黒髪を左手で丁寧にかきあげる彼女の姿は、どうしても儂くてしょうがなかった。

「もういいわ」

彼女は言って、塩タマラーメンのどんぶりを手で少し前に押しやって、自前のハンカチで口をぬぐった。

「まだ残ってるよ」

そういう質問は、彼女には意味がないことを僕はもう分かっていた。だから僕はゆっくりとジーパンの尻ポケットから、財布を出した。

彼女が残したラーメンは、どうしてもか、生ぬるい感じが漂っている。

これは彼女の生き方に起因している。

彼女はいつも食事を残す。最後まで食べきらない。僕は彼女と食事をして、彼女が完食したのを見たことがない。それは会社で食べる弁当などでも同じなようだ。パートのおばちゃんが、「彼女、いつも小食ねえ」と言っていたのを思い出す。

僕は最初は口を挟んでいたのだけれど、彼女からの説明を聞いて、それからはなんとも忠告しづらくなってしまった。

彼女が食事を残すわけは、別に小食だからというわけじゃない。

彼女の生き方、人生に対する姿勢がそうさせているらしい。

それはある日の日曜日だった。喫茶店で彼女は僕にこういった。その日は映画の帰りだった。僕はハードボイルドな映画のテンションに任せて、前から聞いてみたかった、その彼女の食性について尋ねてみた。

「ごはんが、全部なくなっただときを見るのが、怖いの」

彼女はいった。

「なくなったときを見るのが怖いのか？」

僕は丁寧な言葉を繰り返した。

「ええ」

「なくなるのを想像するのが、怖いんじゃないかって？」

「そうよ？ どうしてそんなに言葉にこだわるの？」

「いや……」

僕は言って、コーヒーをストローで飲み干した。

僕としては、どっちでも同じだと思っただけだな。だって彼女は

まだ、何も経験していないから。

彼女はココアを少し残した。僕らはそうして喫茶店を出た。

彼女いわく、食事が全てなくなると、絶望に近い恐怖が、彼女をねっとり抱きしめるらしい。目の前に希望を残しておくのが、彼女の生き方だそうだ。

食事だけに留まらず、そうやって彼女は、いたるところに希望を残す。

あえて第一希望の大学を受験しない。

仕事も、自分のしたかった編集の仕事は選ばなかった。ヨーロッパに行きたいらしいのだが、いまだにそこには行っていない。

ぐっすり眠ることを避ける（夜中に何度かアラームがなるように設定するらしい）。

食事に、仕事に、人付き合いに、彼女は「余り」を作ろうとする。

欲求の余り。少々の妥協。中途な達成感。

それがいい生き方なんだと彼女は述べる。

「それだとラクなのよ。失望はしないし」

「ふうん……そういうもんなんだ」

「納得いってなさそうね」彼女はいった。

「議論する？」僕はいった。

彼女の答えはわかっていた。

「やめとくわ」

僕はよく、彼女が何か物を口に含んだとき、ペツと、いくらか吐き出しているのを見た。

舌で味わうだけでいいのだそうだ。生きていけるのかなと心配したけど、彼女は「ちよっとお腹が空いている」ときには、ちゃんと食べるそうだ。極度の空腹の時だけ、物を吐き出す。僕は複雑な心境だけど、ちよっと胸をなでおろした。

まあそれでも、今日だってまあまあ食べていたので、僕は内心、安堵している。

ラーメン屋で安堵するなんて変なデートだ。

さて、そして僕は、こうして彼女と一緒にいるんだけど、僕は彼女の何なのだろう。

肉体関係には至っているけど、僕は「彼氏」とみなされない。

彼女は僕を「彼氏」と呼ばない。

「幸せになりすぎると、続きがないから」

彼女は誠心誠意を込めて説明してくれた。

彼女の誠意に心を打たれて、僕は彼女の説明にうなづいた。

変だけど、僕は彼女がまた好きになった。

「出ないの？」彼女が僕を呼んだ。店のカウンターで、冷水の入ったグラスをじっと見つめている僕は顔を上げた。彼女は隣で僕の服の裾を引っばった。

「うん」

僕はカウンターから降り、伝票をとって会計に向かった。

彼女との食事はいつも別会計。甘えきってしまったくないようにと、彼女がいつてきかないのだ。

ラーメン屋の暖簾を上げて、彼女は歩道に降り立った。

ふわふわした軽さが、彼女の足元を朧に見せる。

彼女の後姿を見つめながら、僕は思う。

彼女はいつかきつと、人生をやりつくさないうちにケリをつけようとするだろう。

そして多分、それは未遂ですむだろう。

幸か不幸か。

それを決めるのは彼女だけど、僕からしたら、彼女の生き方は逃げ場のない輪廻だ。

僕はあごを上げて空を見た。

冬が近い。

澄んだ空に、淡い雲が少しあった。

どうだろう、ひとつ提案してみようかな。三年の付き合いだし、僕自身、君をいぶかしがることもなくなった。

これからゆっくり、変化に向かうのもいいだろう？

ラーメンのどんぶりを思い出す。

ひとつの物事をやり終えた先は、何も不幸ばかりじゃないよ。

どんぶりにラーメンが残ってるのは、確かに安心するかもしれない。

目の前に確かなものがあるっていうのは、安定につながるね。

希望が残ってれば、そのイメージで日々を包んでいける。

けれど、君が持とうとしている希望は、ちょっと僕のと違う気がするんだ。

だから、ひとつ提案したい。そして一緒に話したい。

僕は彼女の方へ歩いた。

ね、ラーメンの話しに戻っちゃうんだけど。汁まで飲みきったなら、どんぶりの底の様子が見えるだろう？

飲まなきゃ見えないんだよ。多分。

僕と彼女と器（うつわ）のそこ

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7368d/>

---

僕と彼女と器（うつわ）のそこ

2008年11月7日08時54分発行